

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 5 年 8 月 28 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 13名	(依頼数) 16名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3870103466
事業所名	グループホームさしもも
(ユニット名)	ユニット1
記入者(管理者)	
氏名	山岡 和子
自己評価作成日	令和 5 年 8 月 14 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 常に思いやりを持ちましょう。 常に寄り添う心を持ちましょう。 常に笑顔で接しましょう。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 新型コロナウイルスにより、外出支援が中々難しく出来ていなかったが、令和5年お花見より、パーベキュー、夏まつりなど少しずつユニット合同行事を増やせるようになったが、まだ遠出までは行けていない。以前に比べてご利用者様のレベルも変わり徘徊や、脱走者もなくなっているため、その日のご利用者の状況で施設は行っていない。運営推進会議へ家族様の参加について、3年前より(コロナの時期)感染対策として書面報告としている。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 市内中心部から少し離れた郊外にある事業所は、近くに山などの風景が眺められるなど、自然を楽しめる閑静な住宅街に立地している。建物は、民家だった建物をリフォームして活用していることもあり、利用者は自宅にいるような家庭的で落ち着いた雰囲気、生活を送ることができる。また、母体の医療機関が近隣に位置し、必要に応じて、医師や看護師などの専門的な助言を受けることもでき、利用者や家族には安心感がある。医師である代表者は週2回程度事業所を訪れ、利用者と一緒に歌を歌ったり、職員と気軽にコミュニケーションを図ったりするなど、積極的に利用者や職員と関わりを持つ時間を大切にしている。管理者等はアセスメントやカンファレンスを大切に、職員間で情報共有や検討をするともに、職員は人権や尊厳などに配慮した声かけを行いながら、一人ひとりがその人らしい生活を送れるような支援にも努めている。さらに、職員同士の良好な関係が築かれ、お互いに声をかけ合うほか、笑顔忘れず思いやりを持って利用者に接することができている。加えて、調理専属の職員が、旬の食材をふんだんに使用した食事は利用者に好評で、楽しみの一つにもなっている。</p>
--	--	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I. その人らしい暮らしを支える									
(1) ケアマネジメント									
1	思いやり暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	家族、利用者との会話の中でしたいことや思いを聞きながら把握に努めている	○	/	○	入居時に、職員は利用者や家族から、思いや意向を確認している。日々の生活の中で、職員は利用者から思いを聞くとともに、意思疎通が難しい利用者には表情やしぐさなどを観察し、思いをくみ取るよう努めている。また、把握した情報は、連絡ノートへ記録を残すとともに、申し送り等を活用して、職員間で共有をしている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	常に職員目線ではなく利用者目線、おもいを大切に話し合い支援をしている。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	面会時など日々の状況を説明、家族や親戚の方にお話を聞くようにしている。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	利用者の思いを理解し、カンファなどで検討、連絡ノート活用し記録に残している。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	カンファレンスで一人ひとりの状況確認し、出来る範囲で寄り添い、話しも聞くようにしている。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	家族や親戚の方から入所前に話を聞くようにしている。	/	/	○	入居時に、職員は利用者や家族から、以前していた仕事や趣味、生活歴等の聞き取りをしている。また、以前利用していた介護サービス事業所の関係者や介護支援専門員から、情報を提供してもらうこともある。新たに得られた情報は、連絡ノートに追記するなど、職員間で情報を共有している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	利用者の身体、精神面の変化に早く気づき、職員で情報の共有し、現状の把握に努めている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	日々の変化や、過ごし方を把握に努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	知り得た情報は職員へ共有し、カンファにて検討している。	/	/	○	事前に把握したアセスメント情報等をもとに、月1回ユニット会やカンファレンスを活用して、職員間で気づきやアイデアを出し合いながら、利用者本人の視点に立ち、より良いサービスの提供を検討している。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	検討し、対応する中で、新たに問題点があれば再度検討している。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	日常会話を通して思いや、意向を聞き取り、介護計画に反映している。	/	/	/	○ 事前に、利用者や家族、医療関係者等から出された意見を集約した上で、月1回実施するユニット会やカンファレンスを活用して職員間で話し合い、計画作成担当者と担当職員を中心に介護計画を作成している。また、ユニット会等では、活発な意見交換が行われるように、職員は必ず1回以上発言してもらうなどの工夫をしている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人、家族、職員、医療関係者とケアについて話し合い、意見、アイデアを頂き作成している。	○	/	/	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	一人ひとりの思いを尊重し安心して過ごしていただけるよう考えている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	コロナの時期にはいり、家族地域との協力が難しくなった。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	毎月カンファレンスにて情報の共有、理解し、把握している。	/	/	/	◎ 介護計画の内容は、カンファレンスを通して職員間の共有に努めるとともに、談話室等に個別のファイルを置き、職員はいつでも確認できるようになっている。計画に沿ったケアの実施の有無を、定期的に介護記録等をもとに、担当職員が確認をしている。管理者は、より記録内容が充実できるように、「利用者の会話を多く盛り込むように職員へ伝えていきたい」と考えている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	6か月の介護プランの見直し。前プランで実践できたか、結果どうかをモニタリングを行い支援につなげている。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	通常6か月で見直ししている。利用者の状態(大きく変化ある場合)は期間前に見直しを行っている。	/	/	/	◎ 基本的に、6か月に1回介護計画の見直しをしている。毎月実施するカンファレンスを活用して、利用者の現状等の確認をしている。また、利用者の状態に変化が生じた場合には、家族に連絡や報告するとともに、意見を聞き取った上で検討を行い、現状に即した新たな計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月1のカンファレンスで現状確認を行っている。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	状態に変化がある場合には期間前に見直しを行っている。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的にユニット会議をもち緊急案件があればその都度会議を行っている。	/	/	/	◎ 日々の申し送りのほか、カンファレンスを活用して、利用者一人ひとりの課題解決や情報共有に努めている。カンファレンスは、開催日の1か月前までに日程を決めて職員に周知し、休日の職員も含め、可能な限り多くの職員が参加できるよう配慮している。また、連絡ノートに会議録を残し、参加できなかった職員には会議録を確認してもらうとともに、重要事項は口頭で伝達するなど、確実な情報伝達に努めている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	ケアマネ、管理者、主任が主体となり職員の思いや、気付き等発信出来るよう気に掛け行っている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	◎	一か月前から職員に会議の日程を周知し、参加不可能な場合でも必ず伝えるようにしている。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	全て連絡ノートへ記載し、把握ができればサインし、また口頭でも伝えるようにしている。	○	/	/	◎ 日々、朝夕の申し送りを活用して、情報共有を図ることができている。また、連絡ノートには、家族から出された要望のほか、利用者の状態に関する情報や主治医からの指示などが記載され、職員は出勤時等に必ず確認するようになっている。さらに、ケアを提供するにあたり、不明な点があれば、職員同士で確認し合うこともできている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	利用者のしたい事の把握に努め、可能な限り叶えるよう努力している。	/	/	/	○ 日々の着る服や飲み物、おやつ、入浴、レクリエーションなどの様々な場面で、職員は利用者者に声をかけ、自己決定できるよう支援している。また、塗り絵の得意な利用者者が、他の利用者者が作成した作品を見て、「とても綺麗に塗れています、すごいですね」と喜びの声をかけてくれるなど、利用者同士や職員が声をかけ合いながら、活き活きとした生活を送れるような支え合いも見られる。訪問調査日には、職員からテレビの番組内容や好みの話題を提供しながら利用者へ明るく話しかけるなど、少しでも楽しみのある生活が送れるような雰囲気づくりをしている様子を窺うことができた。さらに、利用者の希望する呼称は、家族に確認した上で、「事務長さん」などの以前の仕事の肩書きで呼ぶこともあり、利用者の意向やこだわりなどにも配慮している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	利用者の思いで自己決定する機会を日々の中でつくるようにしている。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのベースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	利用者中心で、日々の暮らしの支援を行うように心掛けている。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	利用者の笑顔、笑いを引き出せるよう声掛け、行動には気を付けている。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らしができるよう支援している。	○	自己表現のできない方には、表情やしぐさなどでキャッチし、その人にあった支援ができるようにしている。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	プライバシーに関しては内部研修でも勉強し、自己評価シートを年2回提出している為、声掛け、態度には気を付けている。	○	○	○	◎ 内部研修等を通して、職員は人権や尊厳、プライバシーなどを学び、意識して利用者の自尊心やプライバシーに配慮した言動を心がけている。利用者への接し方などが振り返られるように、職員一人ひとりが定められたシートを活用して自己評価を実施し、管理者へ提出をしている。また、居室へ入室する際に、必ず職員は「〇〇さん、入りますよ」など、利用者にも声をかけてから入室するとともに、退室時に、「ありがとうございました」などと伝えることができている。不在時にも、事前に利用者にも声をかけ、了承を得た上で入室することができている。時には、他の利用者がいる空間で、「トイレに行きましょう」などと、周りに聞こえる大きな声で、声をかけてしまう職員も見られるため、気づいた場合には管理者から、個別に注意喚起をしている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	職員は常に声掛けや、声の大きさなど気を付け対応を行っている。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	職員は利用者のプライベート空間と理解し、居室の出入りには利用者にも声掛け、十分な配慮をしている。	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	就業規則にも含まれており、職員は入社後目を通してサインをしている為理解している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	全利用者ではないが、分からない事は互いに教え合うような関係性を築けている。				職員は、利用者同士の関係性や性格を把握し、配席などの考慮をしている。中には、口の悪い利用者もあり、言い合いなどのトラブルが起こりそうなことも多いが、職員同士で声をかけ合って早期に間に入るなどの対応をしている。また、他の利用者となるべく関わりを持ちたくないと考えている利用者もあり、職員が手作りしたパーテーションを置くなどの工夫をしている。さらに、食器拭きや洗濯物たたみなど、利用者に手伝ってもらった場合には、職員から「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	中には助け合いながら過ごされている方もいる。職員は理解している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	トラブルになりそうな時には、職員をはさみ会話やレクリエーションをおこなうようにしている。				
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	利用者同士トラブルにならないように、早めの対応を取ったり、他の利用者が不安不穏にならないよう努めている。				
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	◎	家族や親戚から情報を頂き把握している。				
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	コロナの時期ではあるが、家族や親戚と出かけたり知人が面会に来られたり、できるだけつながりを切れないよう支援に努めている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	意思表示の困難な利用者家族から、今までそのようなお話しはないが、あれば希望に沿いたいと思っている。	○	×	△	コロナ禍において、外出制限が設けられ、人の多く集まる場所への外出を控えていたが、今年に入り、屋外でバーベキューを実施したり、季節に応じて、桜などの花見に出かけたりするなどの活動を再開し、少しでも利用者が気分転換を図れるよう支援している。また、天気の良い日には散歩に出かけたり、花壇で花の世話をしたりすることもできている。中には、家族と一緒に、外食を楽しむ利用者もいる。さらに、今年は事業所の夏祭りを開催することができ、利用者と一緒に楽しむことができた。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	○	家族、認知サポーターなど協力を得ながら支援している。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	内部研修等で勉強し、利用者の変化や要因を考え、自分だけの考えではなく皆でケアを話し合い支援している。				できることは利用者自身にってもらうほか、できそうなことは職員と一緒にするようにしている。また、日々の生活の中で、体操や散歩を実施したり、レクリエーションや塗り絵、洗濯物たたみなどの生活リハビリを取り入れたりするなど、利用者の心身機能の維持に努めている。さらに、事業所内に設置してある手すりを活用して、なるべく歩行してもらえるように、職員は工夫した声かけをしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	職員は機能低下に理解しており、維持出来るようケアについて話し合い支援している。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	出来るようなことには常に職員と一緒にしている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	一人ひとりの習慣や希望に添えるよう、楽しみ事、役割を把握に努め支援している。				洗濯物たたみや食器拭き、プランターへの花植えなど、職員は利用者一人ひとりの得意なことや楽しみのある役割や出番を担ってもらい、張り合いのある生活が送れるよう工夫している。高齢化に伴い、要介護度が上昇した利用者もいるが、無理強いないことと、少しでも洗濯物たたみなどのできることを、できる時に楽しく手伝ってもらえるような支援を心がけている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	できるだけ一人ひとりの楽しみ、役割、出番を作れるように考えながら支援しているが、毎日ではない。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	こだわりをお持ちの方はご自分で選ばれ、職員はアドバイスを行っている。				起床時に、服を選んで自分で着替えをする利用者もおり、職員は声かけや見守りをするほか、できない部分のサポートをしている。中には、電気シェーバーを渡すと、自分で髭を剃る利用者もいる。また、衣服の乱れや汚れが見られた場合には、利用者の自尊心を傷つけないように、さりげなく声をかけてフォローをしたり、居室に移動して着替えてもらったりするなどの対応をしている。訪問調査日には、食事中に職員が利用者の口の周りを拭いたり、ティッシュを渡して鼻をかむフォローをしたりするなど、さりげなくサポートを行う職員の様子を見ることができた。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	自己判断できない方には職員が聞きながら、髪型、洋服選びを行っている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	職員が利用者に関心しながら対応している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しむよう支援している。	○	職員がアドバイスしながら支援している。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	プライドを傷つける事なくさりげない支援に努めている。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	要望があれば行くことが出来るが、要望が出ていない。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	できるだけ本人の想いに添えるよう努めている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	「食」の意味を理解し一人ひとりの状態に合わせて食事形態を変えている。				週3回業者に食材を配達してもらい、調理専属の職員が届いた食材を見て献立を考え、料理して食事を提供している。旬の食材を多く使用し、彩り豊かな食事は好評で、利用者の楽しみの一つとなっている。食器類は、入居時に利用者に馴染みの物を持参してもらうほか、事業所で使いやすい物を用意することもある。利用者の状態に応じて、刻み食やミキサー食などの食の形態にも対応をしている。食事の際に、職員は見守りや介助などのサポートに専念し、利用者とは別々に食事をしている。食事前には、職員が一つひとつのメニューを丁寧に利用者にお知らせする様子が見られ、食事を待ち遠しくなるような支援も行われていた。また、献立を栄養士にまではアドバイスを受けることはできていないが、必要に応じて医師から意見をもらうなど、専属の職員がバランスや季節感を考えた食事を提供している。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	中々利用者と一緒に行っていない。			△	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	×	時折、職員と一緒に後片付けしてくれる事もあるが、買い物、調理、盛り付けまでは出来ていない。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	◎	一人ひとりの苦手、アレルギー等には把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音なつかしいもの等を取り入れている。	◎	食事支援の職員がアレルギー、苦手な食材を把握している為、季節感を考えながら支援している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼、嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	咀嚼、嚥下が悪い方はミキサー食やきざみ、トロミをしているが、利用者の状態に合わせ、カンファにて検討対応している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	ご自分のこだわりがある方には、ご家族へお伝えし届けて頂いている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	×	職員は利用者とは食べておらず、利用者の食事介助が終わってからの順番で食事を摂っており、しっかりサポート出来ている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	職員がメニューをお伝えしたり、食に興味を持ってもらえるよう配慮している。	○		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	食事、水分摂取表を活用し1日の摂取確認出来るようにしている。カロリーまでは把握出来ていない。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	利用者の状態に合わせて食事形態の工夫し、栄養や脱水にも気を付け取り組んでいる。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	調理支援の職員がおりバランスを考えながら支援してくれている。栄養士のアドバイスは受けていない。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食中毒など予防のため衛生管理を日常的に行い、検査をとり、1週間保存使用と管理に努めている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	ご自分でケアのできない方は、職員が介助している。十分重要性に理解している。	/	/	/	訪問歯科医から指示やアドバイスをもらうなど、職員は口腔ケアの重要性を理解している。利用者の状態に応じて、1日1～3回歯磨きなどの口腔ケアを実施する際に、職員は口腔内の様子を確認している。また、異常や問題が生じた場合には、早期の訪問歯科診療に繋げている。さらに、一人ひとりの口腔内の状態や治療状況などが記録に残され、職員間で共有している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	職員は口腔ケア介助の際に、口の中の状況を確認し把握に努めている。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	訪問に来て下さるとき、口腔ケアや指導もあった。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	歯科医の指示に従ってケアを行ったり、義歯の手入れが適切に行えるよう支援している。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	職員は声掛けしながら、支援に努めているが、どうしても自分でできない方もおり、職員が介助しながら清潔を保てるよう支援している。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	△	理解はしているが身体機能を高めることにはつながっていない。	/	/	/	事業所では、基本的に利用者がトイレで排泄できることよう支援している。利用者一人ひとりの排泄状況は記録に残され、職員は排泄パターンを把握し、状態に合わせて声かけやトイレ誘導などの支援に努めている。また、紙パンツやパッドなどの排泄用品の使用時には、カンファレンスの際に職員間で適切な用品の使用などを検討するとともに、家族に相談の上で使用をしている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解しているため、訪問看護、主治医と連携を取り早めの対応をとっている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	一人ひとりの排泄パターンを把握に努めており、変化を見落とさず、医療との連携をとっている。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	利用者の状態について月1のカンファレンスで話し合い、状態にあった支援を行っている。	◎	/	◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	カンファレンスで改善点等検討し対応している。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	排泄チェック表等活用しながら、パターンを把握し早めの声掛けを行っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人への確認はしても分からなく返事がないため、家族へ状況説明し、変更等確認しながら対応している。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	○	一人ひとりの状態に合わせて使い分けを行っている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	できるだけ運動目標促しているもの中々出来る方が少ない。飲み物の工夫は行っている。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	出来る限り希望に添えるよう対応しているが、限られた時間の中での対応のため時間帯、長さ、回数は難しい。	◎	/	○	週2回を基本として、利用者は入浴することができる。事業所には機械浴槽が設置され、利用者の状態に合わせて個別浴槽との使用を使い分け、安心安全に湯船に浸かれるように支援をしている。また、利用者の希望に応じて、湯の温度や入浴順、湯船に浸かる長さなど、柔軟に対応をしている。中には、入浴を拒む利用者もいるが、無理強いすることなく、誘導する職員が上手に声かけをしたり、日にちや時間帯を変えたりするなど、利用者にも少しでも気持ち良く入浴してもらえるような工夫も行われている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	○	入浴剤を使用したりくつろいだ気分で入浴出来るよう支援している。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	一人ひとりの状態に合わせてできること(髪を洗ったり、体の前を洗ったりしてもらい、洗い残し無いか確認し職員が介助している。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	拒否の強い方は、後日に回したり、順番を変え声掛けしたり、出来る限り入浴出来るように支援している。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	必ずその日の状況申し送りしてもらい、血圧や体温等確認し入浴できるか判断している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	申し送りにて一人ひとりの入眠パターンは把握している。	/	/	/	眠剤を服用している利用者もいるが、できる限り日中のレクリエーションの活動量を増やすなど、利用者が夜間に良眠できるよう支援している。現在は、ほとんどの利用者が安眠することができている。また、眠れないことが続く利用者には、健康面を考慮して医師に相談し、指示を仰いで眠剤などを処方してもらうこともある。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	一人ひとりの生活リズムや心理状態の把握に努め、カンファレンスで検討、支援している。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	利用者の状況、状態の変化等、医療連携をとり支援を行っている。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	全室個室の為、ゆっくり休める空間はつくりけている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	手紙のやりとりはない。自ら電話される方はいないが、職員が電話をして利用者となり話される事はある。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	△	促すことはあるが、理解が出来なかったり、拒否される事もあり変わりに職員が手助けをしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	要望があれば、時間帯を考え電話が出来るようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	△	届いた手紙や荷物に対して、出来るだけお礼の電話を入れるよう支援を行っている。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	家族等の理解はされており協力してもらっている。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	△	理解しているがお金を所持する事が難しく、管理ができないため、家族が管理している。一部の利用者は家族と買い物に2か月に1回出かけている。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	買い物先への協力の働きかけは行っていないが、家族、職員が同行している。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	家族の要望にて金銭を所持していない。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	一部の利用者は所持しているが、何処にのけたか分からなくなっている。家族と話し合い理解している。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	利用者が欲しいもの、買いたいものがあれば施設で立替行い、毎月入居費の請求の際にレシート又は領収書コピーを同封請求を行っている。入所契約の際説明同意されている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	本人や家族の要望に柔軟な支援、サービス提供が出来るよう努めている。	◎	/	○	コロナ禍以前には、利用者や家族の要望に応じて、外出や外泊などの支援をすることができていたが、コロナ禍において、外出や面会などの制限が設けられ、感染対策を講じた上で、可能な範囲の対応となっている。今後管理者は、感染状況を見計らいながら、「徐々に、多様なニーズに応えられるような支援を再開していきたい」と考えている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	施設周りに花や植物を置き季節感が出るよう気にかけている。	◎	◎	◎	出入り口が広く開かれた事業所は、駐車場が完備されている。民家をリフォームした建物は、周辺の住宅等に馴染んでおり、来訪しやすい雰囲気を感じられる。また、ガーデニングの得意な職員を中心に、玄関周りには、季節の花やミニマトなどの野菜が植えられている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を持っており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそくような設えになっていない等。)	○	共用空間は、季節感、落ち着いた過ごせ、家庭的な雰囲気を出せるよう考えている。	○	◎	◎	共有空間の清掃や換気が行き届き、利用者は快適に過ごすことができる。リビングの壁面には、季節を感じられる貼り絵が飾られているほか、地方祭などの行事の思い出の写真が掲示されている。また、利用者の楽しみに繋がるように、さつま芋や人参が育てられ、利用者は成長や収穫を楽しみにしている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	利用者が安心して過ごせるよう配慮し、匂いや汚れも気にして行っている。	/	/	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	共感スペース季節ごとの飾り付けや行事の写真などを張り出し、思い出せるよう工夫している。	/	/	◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	居室で過ごされる方もいれば、フロアで仲良しどうし話されたり、塗り絵に没頭されたり過ごされている。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	本人の使い慣れた物や馴染みの物等、こだわりのある方は持って入ってもらい、本人が安心して過ごせるよう工夫している。	○	/	◎	居室には、ベッドやタンスが備え付けられている。利用者の希望に応じて、馴染みの物を持ち込むこともできるが、多くの居室に置かれている物は少なく、すっきりとした空間となっている。中には、家族の写真や自分で作った作品、誕生日の寄せ書きなどを飾っている利用者もいる。また、居室内に仏壇や位牌を置いている利用者もおり、希望に応じて、毎朝職員がご飯とお茶を供え、夕方には下膳するなどの対応をしている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	△	限られた方にかぎるが、洗濯物た積み、食事の後の食器下げなど、出来る方にはお手伝いお願いしているが、ほとんどの利用者は出来ない。	/	/	○	リビングや廊下には unnecessary な物を置かず、車いすの利用者もゆったりと移動できるような動線が確保されている。また、利用者が迷わないように、居室の入り口には利用者の名前や写真を貼られてあるほか、分かりやすいトイレの表示も行われている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	新聞、雑誌、塗り絵などいつも活用している物は、いつでも手に取って見れるようにはしている。	/	/	/	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	△	自立の方で帰宅願望が時折見られ、玄関を開けて外に出ようとしたらという行動がある為、玄関にセンサーも付けているが、その時の利用者の状況で鍵を掛け対応している。	x	◎	△	職員は内部研修などで学び、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。玄関にはセンサーが取り付けられ、職員に利用者や来訪者の出入りを認識しやすくしているが、帰宅願望が強く、不穏な利用者もおり、安全面を第一に考えて、日中にも玄関の鍵をかけるを得ない状況となっている。また、職員は家族へ説明し、玄関の施錠の理解を得ている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	△	施錠については家族へ説明おこない安全確保の理解は得ている。	/	/	/	
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	一人ひとりの病歴、注意事項等はフェースシートや、毎月のカンファレンス等で確認している。	/	/	/	
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	普段から利用者の様子観察を行い、ささいな事でも職員間で情報共有し、早期発見、医療と連携を取りながら対応、記録にも残している。	/	/	/	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	医療との連携はしっかり取れている。気になることは相談できる関係を築いている。	/	/	/	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	基本、主治医は母体の医療機関だが、本人、家族が希望される場合は希望される医療機関を受診出来るよう支援している。	/	/	◎	
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	必ず管理者や職員が同行し状態、状況説明、医療との関係を築きながら支援している。	/	/	/	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	通院し、受診結果は家族へ報告し状況をしっかり説明している	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	入院の際、その方の状況をフェースシートで送り、又それでも分からない事は電話にてお伝えしている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	常に医療との連携を取り、情報交換等に努めている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	他の医療機関を受診した場合には必ず、状態、状況を訪問看護や主治医へ報告し連携を取っている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	夜間問わず、急変時には訪問看護に連絡、必要に応じて主治医往診来られる体制はとれている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	医療との連携はしっかりとれており、急変時には早めの対応、治療につなげている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	一人ひとりの薬の目的に理解し、状態の変化を家族や医療との連携している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	服薬管理表を活用し服薬前、服薬時には職員同士確認しあい、服薬した職員が利用者の名前の所にサインを行っている為、飲み忘れ、誤薬を防いでいる。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬後の利用者の状態を把握し、疑問点など医療に報告、相談もしている。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	契約時に重度化の指針を家族へ伝えて同意書もいただき、又状態の変化のたび家族へ確認を取りながら対応している。				事業所として、「重度化対応に関する指針」を整備し、入居時に、家族に対応できることなどの説明をしている。利用者の状態が変化し、医療行為などが必要となり、事業所で生活を送ることが難しくなった場合には、母体の医療機関の医師や看護師のほか、家族、職員等と交えて話し合い、方針を共有している。また、病院等への転院する利用者も多く、状況に応じて、事業所で転院支援などの対応をすることもある。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	終末期には、訪看、主治医等情報共有を行い、支援している。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	職員の力量を分かたうえて、支援できるか、できないか見極めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	施設の対応は限られている為、出来る事、出来ない事の説明を行っている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	主治医、看護師、医療機関との連携を図りながら、支援体制を整えている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	家族の不安を考慮し、主治医との連携を取り、施設、医療へ相談できるよう支援している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	内部研修にて学び、早期発見、早期対応に努めている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	ユニット1はコロナ感染を経験しており、今後コロナや感染症が発生した場合、その時の対応を生かせるよう、医療連携を取り速やかに対応出来る体制を継続したい。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	インターネット、ニュース、介護保険課(行政)からの情報を取り入れ対応している。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	常に手洗い、消毒、掃除の徹底し支援している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	◎	家族へ月1回さしも便り、行事や状況の報告を行い、又必要に応じて連絡を取り合い関係を築いている。	/	/	/	コロナ禍以前は、家族に呼びかけて、事業所の行事に参加協力してもらうことができていたが、現在は家族の参加できる行事の開催を自粛している。徐々に制限も緩和され、家族等への検温や体調の聞き取りをするなどの感染対策を講じた上で、15分程度の面会を可能としている。また、毎月の請求書の送付に併せて、事業所便りを送付し、利用者の近況を伝えている。利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた事業所の運営上の事柄や出来事が十分に伝わっていないことが窺えるため、事業所便りを活用して、新人職員や異動を紹介したり、手紙などを活用して、家族に担当職員等の退職を報告したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	△	コロナ前は行事のご案内し参加して頂いていたが、コロナ過に入り行事の参加が難しくなっている。	○	/	△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしふりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たよりの発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	家族には定期的な報告、(便りや行事の写真等)様子を伝えている。	◎	/	○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	便りや連絡の際、施設への面会やお電話にて本人と少しでもお話ができるよう家族へは働きかけている。	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	行事や書類の報告、協力は得ているが職員の異動や退職まではお伝えしていない。	×	/	△	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	一人ひとりのリスクについて家族へはお伝えし安心して暮らしが出来るよう話している。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	◎	家族と職員の関係性も良く、不安や相談が気兼ねなく行える雰囲気を作っている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約変更、加算変更等、家族へ説明行い理解納得を得ている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	施設での支援が難しいと主治医が判断された場合には、主治医、施設が説明行い、納得され退居となっている。	/	/	/	
III. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	以前は2か月一度運営推進会議を行い、報告等行っていたがコロナ過になり、書面報告になっているが理解は頂いている。	/	◎	/	コロナ禍以前は、地域住民と一緒に餅つきをしたり、地方祭などの行事に参加したり、運営推進会議に参加してもらうなど、利用者と交流を図ることができていた。コロナ禍において、事業所周辺の散歩時に、近隣住民へ挨拶や会話を交わす程度に留まっている。また、事業所は町内会に加入し、地域の回覧板などが回ってきている。今年の夏には、事業所の夏祭りを開催することができ、利用者と一緒に楽しむことができた。今後管理者は、感染状況等を見計らって、「徐々に地域との交流を再開していきたい」と考えている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	利用者が散歩や職員が庭手入れの際、地域の方と日常的な挨拶はしているが、今は地域の活動や参加はできていない。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	今は地域の方との交流が少なく、行事の際、公民館長の協力(イス、テーブルを借りる)ほどになっている。	/	/	/	
		d	地域の方が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	地域の方が立ち寄り遊びに来る事がない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	お会いしたらご挨拶はするが、立ち寄ってもらうような日常的付き合いは出来ていない。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりを充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	今は地域の方との交流が少なく、日常的な活動支援は行ってない。	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	散髪は2か月1回来所にて行っており、理解協力してくれている。その他はあまり交流がない。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	×	コロナ前は家族の参加はあったが、コロナ過になり書面報告になっているため、行えていない。	×	/	△	コロナ禍が続いているため、運営推進会議の開催は、現在も書面開催となっている。コロナ禍以前は会議案内を家族へ送付し、参加協力してもらったこともあったが、現在は案内を送付していない。コロナ禍が落ち着き、集合形式の会議開催が可能となった場合には、全ての家族に会議の参加案内を送付したり、会議の終了後に参加できなかった家族等に議事録を送付したりするなど、より多くの参画を得ながら、有意義な会議開催となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	運営推進会議、外部評価はユニットごと玄関へ置き、誰でも見れるようにしている。	/	◎	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	コロナ過になり行えていない。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	職員は理念を把握し、日々業務に取り組んでいる。	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	来所の際、誰でも見れるように玄関に掲示している。	×	×	/	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	毎月の内部研修、必要に応じて外部研修に参加している。	/	/	/	医師である代表者は週2回程度事業所を訪れ、釣れた魚を持ってきてくれたり、利用者と一緒に歌を歌って和やかな時間を過ごしたり、職員に気軽に「困りごとはないか」などの声をかけて、コミュニケーションを図るなど、積極的に利用者や職員と関わりを持つ時間を大切にしている。職員は、代表者の利用者への思いや気配りが伝わってくるほか、代表者に直接意見を聞いてもらえることが、モチベーションにも繋がっている。また、様々なテーマを取り上げて、毎月内部研修を実施するほか、必要に応じて外部研修の受講する機会を設けたりするなど、職員の働きがいやスキルの上に向けて取り組んでいる。さらに、職員同士の良好な関係も築かれ、事業所の人員配置に余裕まではないが、希望休や有給休暇を取得できるなど、働きやすい職場環境づくりをしている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	毎月の内部研修は講師を決められた人がするのでなく、順番で回すことで、嫌でも勉強するようになるので(資料作り、読むこと)少しはスキルアップにつなげている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	雇用条件の見直しや資格面等、やりがい、向上が心持できるように変更、整備に努めている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	△	内部研修は行っているが、コロナ過になり中々、他施設と同業者との交流、勉強会、意見交換を行っていない。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	自己評価を年2回配布し、職員の思いを引き出せるよう必要に応じて面談も行っている。	○	○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	年2回内部研修にて虐待を勉強し、再認識しながら適切なケアを行えるよう、注意を払い、対応方法を確認している。	/	/	○	年2回、内部研修の中で、虐待防止などを学ぶ機会を設けられ、職員は虐待や不適切ケアにあたる言動などを理解している。また、言い方がきつく、大きな声を出すなどの不適切な言動が見られた場合には、職員間で注意し合うとともに、管理者に報告して、該当職員に指導や注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	月1回のユニット会議にて利用者一人ひとりの変化やケアについて話し合いをしている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	年2回の自己評価や面談で職員の思いを聞くようになっている。又日頃から職員の思いを聞く雰囲気は作っている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	施設内に禁止事項を掲示し、又内部研修にでも周知している。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	身体拘束廃止委員会を行い話し合いをしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を促している。	○	身体拘束を行わないのが施設の方針ではあるが、どうしてもやむを得ない場合(医療からの指示)には家族へ身体拘束を行う期間、時間帯を説明し納得の上、同意書を頂いている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	×	今現在まで、そのようなお話し、相談に乗る機会がない。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	コロナ前までは運営推進会議にも参加して頂いたり、空き状況に応じて利用者紹介して頂いたり連携は築いている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	内部研修にて対応策を周知し医療連携対策をとっている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	内部研修にて再確認している。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	申し送りやミーティングにて報告・改善に向けて検討し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	一人ひとりの状況、状態の変化等、申し送りやきずきノートに記載し情報共有、話し合いを行い検討し防止に取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情窓口を設置し、苦情が出た際には、職員へ伝え理解し対応方法を検討している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情が寄せられた場合には施設で話し合、早期解決に向け対応をしている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	対策案を検討し、改善の経過結果をお伝えし納得を得ている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	苦情、意見等、気兼ねなく言える雰囲気を作り事業所苦情窓口担当や行政の苦情窓口もご案内している。	○		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞き、可能な範囲で対応をしている。家族には、来訪時や電話連絡時を活用して、職員から利用者の様子を伝えるほか、意見や要望を聞くように努めている。また、入居時に、管理者等は利用者や家族に対して、苦情相談の窓口や受付手順などを丁寧に説明している。さらに、日頃から管理者は、職員とのコミュニケーションを大切にしながら意見を聞くよう努めるとともに、カンファレンスの際に、職員から必ず1回以上の発言をもらうなど、職員から出された意見を収集し、利用者本位の支援へ繋げられるように取り組んでいる。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	契約書にも記載している施設の苦情窓口、行政の苦情窓口相談を、契約の際説明している。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	△	毎日ではないが来られた際には、管理者や主任へ代表者が意見や提案を聞かれている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	職員の意見を聞く機会を持ち、検討し利用者本位の支援に努めている。			○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	◎	年2回行っている。				外部評価の自己評価は、職員に意見を聞きながら、管理者を中心に作成している。サービスの評価結果は、運営推進会議を活用して、参加メンバーに報告をしている。コロナ禍が落ち着いた際には、家族や会議の参加メンバーに呼びかけて、目標達成の取り組み状況などのモニターに協力してもらったり、状況を伝えて意見をもらったりするなど、サービス評価の取り組みに理解が得られるような周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	事業所の課題を明確にし、目標達成に向け改善策を検討取り組んでいる。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	以前の外部評価の結果、目標を運営推進会議で伝え、職員にも内部研修にて報告は行ったが今後のモニターは、してもらっていない。	△	△	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	目標達成計画にあげた取り組みの成果を、事業所内で確認している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	災害の研修を行い、事業所の災害マニュアルを再確認している。	/	/	/	コロナ禍以前には、消防署や地域住民に参加協力してもらい、合同の避難訓練を実施することができていたが、コロナ禍が続いていることもあり、職員のための訓練実施となっている。法人・事業所として、様々な災害などのマニュアルを作成し、研修の中で災害発生時の対応などを学ぶこともある。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には訓練の様子の写真を事業所内に掲示したり、家族や運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、周知や理解を得る方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	防災担当者が日中、夜間想定した訓練企画をあげ、消防立会いのもと訓練行っていたが、コロナ禍になり施設のための訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的点検を行っている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	×	自施設のための消防訓練はおこなっているが、近隣、地域の方と合同訓練は行えていない。	×	×	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	地域のネットワーク作りや共同訓練はしていない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	△	運営推進会議を通して内部、外部研修の報告を行っている。	/	/	/	地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしているが、コロナ禍が続いていることもあり、地域住民の事業所への来訪自体が少なくなっている。また、事業所では、高校生の実習の受け入れに協力をしている。さらに、市行政や地域包括支援センターなどの会議や研修に参加する機会は少なくなっているものの、法人内の他の事業所等と協力しながら、連携を図ることができている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	△	地域の方の見学の際、相談支援おこなっている。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	事業所を解放、活用出来ていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	昨年は実習生の受け入れを予定していたが、コロナ感染者が出たため中止になった。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	医療、包括支援センター福祉との連携はできているが、地域イベント、ボランティア活動は出来ていない。	/	/	○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 5 年 8 月 28 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 13名	(依頼数) 16名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3870103466
事業所名	グループホームさしもも
(ユニット名)	ユニット2
記入者(管理者)	
氏名	山岡 和子
自己評価作成日	令和 5 年 8 月 14 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 常に思いやりを持ちましょう。 常に寄り添う心を持ちましょう。 常に笑顔で接しましょう。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 新型コロナウイルスにより、外出支援が中々難しく出来なかったが、令和5年お花見より、バーベキュー、夏祭りなど少しずつユニット合同行事を増やせるようになったが、まだ遠出までは行かれていない。 日のご利用者の状況で施設は行っていない 議へ家族様の参加について、3年前より(コロナの時期)感染症対策として書面報告としている。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 市内中心部から少し離れた郊外にある事業所は、近くに山などの風景が眺められるなど、自然を楽しめる閑静な住宅街に立地している。建物は、民家だった建物をリフォームして活用していることもあり、利用者は自宅にいるような家庭的で落ち着いた雰囲気、生活を送ることができる。また、母体の医療機関が近隣に位置し、必要に応じて、医師や看護師などの専門的な助言を受けることもでき、利用者や家族には安心感がある。医師である代表者は週2回程度事業所を訪れ、利用者と一緒に歌を歌ったり、職員と気軽にコミュニケーションを図ったりするなど、積極的に利用者や職員と関わりを持つ時間を大切にしている。管理者等はアセスメントやカンファレンスを大切に、職員間で情報共有や検討をするともに、職員は人権や尊厳などに配慮した声かけを行いながら、一人ひとりがその人らしい生活を送れるような支援にも努めている。さらに、職員同士の良好な関係が築かれ、お互いに声をかけ合うほか、笑顔忘れず思いやりを持って利用者に接することができている。加えて、調理専属の職員が、旬の食材をふんだんに使用した食事は利用者に好評で、楽しみの一つにもなっている。</p>
--	--	---

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I. その人らしい暮らしを支える									
(1) ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	△	全盲の方もいるので、なるべく意向には努力している	○	/	○	入居時に、職員は利用者や家族から、思いや意向を確認している。日々の生活の中で、職員は利用者から思いを聞くとともに、意思疎通が難しい利用者には表情やしぐさなどを観察し、思いをくみ取るよう努めている。また、把握した情報は、連絡ノートへ記録を残すとともに、申し送り等を活用して、職員間で共有をしている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人様に確認し職員一同で話し合い、希望に答えるよう努力している	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	毎月一回のさしも便りにて状況を報告し、来訪時に家族様から様子などを共有	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	毎月一回のカンファレンスにて情報報告し職員一同で共有し記録に残している	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	カンファレンス時に一人一人確認し、担当者はもちろん、他の職員と情報、状況共有している	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居時前の面接や入居後再度確認し、情報を共有している	/	/	○	入居時に、職員は利用者や家族から、以前していた仕事や趣味、生活歴等の聞き取りをしている。また、以前利用していた介護サービス事業所の関係者や介護支援専門員から、情報を提供してもらうこともある。新たに得られた情報は、連絡ノートに追記するなど、職員間で情報を共有している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	家族様から情報や職員が先ずは出来ないと判断せずに、声掛けしながらしていただく	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に務めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	今までの生活状況を把握しながら、なるべく近い状況と努力している	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	知り得た情報は職員へ共有し、カンファレンスにて検討している	/	/	○	事前に把握したアセスメント情報等をもとに、月1回ユニット会やカンファレンスを活用して、職員間で気づきやアイデアを出し合いながら、利用者本人の視点に立ち、より良いサービスの提供を検討している。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	検討し、対応する中で、新たに問題点があれば再検討している	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	日常会話を通して思いや、意向を聞き取り、介護計画に反映している	/	/	/	事前に、利用者や家族、医療関係者等から出された意見を集約した上で、月1回実施するユニット会やカンファレンスを活用して職員間で話し合い、計画作成担当者と担当職員を中心に介護計画を作成している。また、ユニット会等では、活発な意見交換が行われるように、職員は必ず1回以上発言してもらうなどの工夫をしている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人、家族、職員、医療関係者とケアについて話し合い、意見アイデアを頂き作成している	○	/	/	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	一人ひとりの思いを尊重し安心して過ごしていただけるよう考えている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	コロナの時期に入り、家族、地域との協力が難しくなった。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	毎月カンファレンスにて情報の共有、理解し、把握している	/	/	/	◎ 介護計画の内容は、カンファレンスを通して職員間の共有に努めるとともに、談話室等に個別のファイルを置き、職員はいつでも確認できるようになっている。計画に沿ったケアの実施の有無を、定期的に介護記録等をもとに、担当職員が確認をしている。管理者は、より記録内容が充実できるように、「利用者の会話を多く盛り込むように職員へ伝えていきたい」と考えている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	6ヶ月の介護プランの見直し。前プランで実践出来たか、結果どうかモニタリングを行い支援につなげている。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	通常6ヶ月で見直ししている。利用者の状態(大きく変化ある場合は)期間前に見直しを行っている。	/	/	/	◎ 基本的に、6か月に1回介護計画の見直しをしている。毎月実施するカンファレンスを活用して、利用者の現状等の確認をしている。また、利用者の状態に変化が生じた場合には、家族に連絡や報告するとともに、意見を聞き取った上で検討を行い、現状に即した新たな計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月1のカンファレンスで現状確認を行っている。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	状態に変化がある場合には、期間前に見直しを行っている。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的にユニット会議をもち、緊急事案があればその都度会議を行っている。	/	/	/	◎ 日々の申し送りのほか、カンファレンスを活用して、利用者一人ひとりの課題解決や情報共有に努めている。カンファレンスは、開催日の1か月前までに日程を決めて職員に周知し、休日の職員も含め、可能な限り多くの職員が参加できるよう配慮している。また、連絡ノートに会議録を残し、参加できなかった職員には会議録を確認してもらうとともに、重要事項は口頭で伝達するなど、確実な情報伝達に努めている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	ケアマネ、管理者、主任が主体となり職員の思いや、気付き等発信出来るよう気に掛け行っている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	◎	1ヶ月前から職員に会議の日程を周知し、参加不可能な場合でも必ず伝える様にしている	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	全て連絡ノートへ記載し、把握が出来たらサインし、また口頭でも伝える様にしている。	○	/	/	◎ 日々、朝夕の申し送りを活用して、情報共有を図ることができている。また、連絡ノートには、家族から出された要望のほか、利用者の状態に関する情報や主治医からの指示などが記載され、職員は出勤時等に必ず確認するようになっている。さらに、ケアを提供するにあたり、不明な点があれば、職員同士で確認し合うこともできている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	したい事のクエストを聞き、希望に答えられる努力している。バラバラの場合は人数多数になる時もある	/	/	/	○ 日々の着る服や飲み物、おやつ、入浴、レクリエーションなどの様々な場面で、職員は利用者へ声をかけ、自己決定できるよう支援している。また、塗り絵の得意な利用者が、他の利用者が作成した作品を見て、「とても綺麗に塗れています、すごいですね」と喜びの声をかけてくれるなど、利用者同士や職員が声をかけ合いながら、活き活きとした生活を送れるような支え合いも見られる。訪問調査日には、職員からテレビの番組内容や好みの話題を提供しながら利用者へ明るく話しかけるなど、少しでも楽しみのある生活が送れるような雰囲気づくりをしている様子を見ることができた。さらに、利用者の希望する呼称は、家族に確認した上で、「事務長さん」などの以前の仕事の肩書きで呼ぶこともあり、利用者の意向やこだわりなどにも配慮している。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	レクリエーション時、自分で歌いたい曲を選んで頂き、皆さんと一緒に歌っている。	/	/	/	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのベースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	職員が一人ひとりに、声掛け確認しながら行っている。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	職員が日常会話しながら、コミュニケーション図り、どんな事がしたいですか?こんなイベントがありますよなどの声掛けを行っている。	/	/	/	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	職員が身振り手振りを使って、思いや意向を理解しようと努力している	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	利用者の誇りやプライバシーに配慮しながら行っている。	○	○	○	◎ 内部研修等を通して、職員は人権や尊厳、プライバシーなどを学び、意識して利用者の自尊心やプライバシーに配慮した言動を心がけている。利用者への接し方などが振り返られるように、職員一人ひとりが定められたシートを活用して自己評価を実施し、管理者へ提出をしている。また、居室へ入室する際に、必ず職員は「〇〇さん、入りますよ」など、利用者に声をかけてから入室するとともに、退室時に、「ありがとうございました」などと伝えることができている。不在時にも、事前に利用者へ声をかけ、了承を得た上で入室することができている。時には、他の利用者がいる空間で、「トイレに行きましょう」などと、周りに聞こえる大きな声で、声をかけてしまう職員も見られるため、気づいた場合には管理者から、個別に注意喚起をしている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	優しい声、トーン、大きさなどに注意し介護を行っている。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	職員が居室への出入り時は、ノックと声掛け等し行っている。	/	/	/	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	職員は、利用者のプライバシーや個人情報漏えい防止に理解し行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	利用者が出来ること、テーブルを拭いていただいたり、昔の歌を覚えてもらったり、料理の仕方を教えてもらったりしている。	/	/	/	職員は、利用者同士の関係性や性格を把握し、配席などの考慮をしている。中には、口の悪い利用者もあり、言い合いなどのトラブルが起こりそうなことも多いが、職員同士で声をかけ合って早期に間に入るなどの対応をしている。また、他の利用者となるべく関わりを持ちたくないと考えている利用者もあり、職員が手作りしたパーテーションを置くなどの工夫をしている。さらに、食器拭きや洗濯物たたみなど、利用者に手伝ってもらった場合には、職員から「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	理解している。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらおう場面をつくる等)。	○	職員は、利用者同士の関係を把握して、トラブル回避のため、席替えしたり、一人に慣れる場所に椅子を配置したりし努力を行っている。	/	/	/	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	自席以外の場所(廊下)に、椅子を何箇所設置し誰でも過ごせる場所を提供している。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	家族様から情報や職員が日常会話(コミュニケーション)から聞き取りし把握している。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	コロナ禍では、外出や外部との接触が難しかった。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	コロナ禍では、施設の周りの散歩、ベランダでのひなたぼっこなどに限られた。	○	×	△	コロナ禍において、外出制限が設けられ、人の多く集まる場所への外出を控えていたが、今年に入り、屋外でバーベキューを実施したり、季節に応じて、桜などの花見に出かけたりするなどの活動を再開し、少しでも利用者が気分転換を図れるよう支援している。また、天気の良い日には散歩に出かけたり、花壇で花の世話をしたりすることもできている。中には、家族と一緒に、外食を楽しむ利用者もいる。さらに、今年は事業所の夏祭りを開催することができ、利用者と一緒に楽しむことができた。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	コロナ以前では、お願する事はあったが、コロナ禍では難しかった。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	職員は、認知症ケアについて理解し、利用者一人ひとりに寄り添いケアを行っている。	/	/	/	できることは利用者自身にってもらうほか、できそうなことは職員と一緒にするようにしている。また、日々の生活の中で、体操や散歩を実施したり、レクリエーションや塗り絵、洗濯物たたみなどの生活リハビリを取り入れたりするなど、利用者の心身機能の維持に努めている。さらに、事業所内に設置してある手すりを活用して、なるべく歩行してもらるように、職員は工夫した声かけをしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	DVDを使用しながら、体操の時間を提供し、嚥下体操やラジオ体操を行っている。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	全盲の方もいるので、常に声掛けが必要で難しい。	○	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	△	皆さん、イベント等を楽しみにされている、ご友人との外食、買い物等の希望しているし把握しているが、なかなか難しい。	/	/	/	洗濯物たたみや食器拭き、プランターへの花植えなど、職員は利用者一人ひとりの得意なことや楽しみのある役割や出番を担ってもらい、張り合いのある生活が送れるよう工夫している。高齢化に伴い、要介護度が上昇した利用者もいるが、無理強いないことと、少しでも洗濯物たたみなどのできることを、できる時に楽しく手伝ってもらえるような支援を心がけている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	日によって、出来ていた事が、できなかつたりがあり難しかった。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	把握しているが、季節感ゼロや重ね着されている場合は声掛けを行っている。				起床時に、服を選んで自分で着替えをする利用者もおり、職員は声かけや見守りをするほか、できない部分のサポートをしている。中には、電気シェーバーを渡すと、自分で髭を剃る利用者もいる。また、衣服の乱れや汚れが見られた場合には、利用者の自尊心を傷つけないように、さりげなく声をかけてフォローをしたり、居室に移動して着替えてもらったりするなどの対応をしている。訪問調査日には、食事中に職員が利用者の口の周りを拭いたり、ティッシュを渡して鼻をかむフォローをしたりするなど、さりげなくサポートを行う職員の様子を見ることができた。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるよう支援している。	○	共同スペースでは、なかなか難しい居室内では、自由にされている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	職員が声掛けしたり、身振り手振りなどジェスチャーで確認を取りながら行っている。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	声掛けし確認しながら行っている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	声掛けし、お手伝いしますねと伝えながら行っている。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	家族の協力もあり、行きつけのお店に行かれていたが認知症の進行もあり、施設で散髪の出張サービスを利用している。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	体調を観ながら行っている。			○	
		g	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	その人の食事形態、のみ込み、むせ込み状態、体調を理解し提供を行っている。				
17	食事を楽しむことのできる支援	b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	以前は、行っていたが、レベル低下により難しくなってきた。			△	週3回業者に食材を配達してもらい、調理専属の職員が届いた食材を見て献立を考え、料理して食事を提供している。旬の食材を多く使用し、彩り豊かな食事は好評で、利用者の楽しみの一つとなっている。食器類は、入居時に利用者に馴染みの物を持参してもらうほか、事業所で使いやすい物を用意することもある。利用者の状態に応じて、刻み食やミキサー食などの食の形態にも対応をしている。食事の際に、職員は見守りや介助などのサポートに専念し、利用者とは別々に食事をしている。食事前には、職員が一つひとつのメニューを丁寧に利用者にお知らせする様子が見られ、食事を待ち遠しくなるような支援も行われていた。また、献立を栄養士にまではアドバイスを受けることはできていないが、必要に応じて医師から意見をもらうなど、専属の職員がバランスや季節感を考えた食事を提供している。
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	×	声掛けするも、「なんで、せないかんの?」と言われるので、その都度声掛けしての対応している。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居時、家族に確認し職員で共有している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのものを取り入れている。	○	利用者に食べたいもののリクエストを聞いたり、旬のものを提供している。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	利用者の体調管理しながら、持ちやすい器に盛り付けたり、見た目も気にしながら(いろどり)行っている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	入居時持参された物を使われているが、持ちにくく、食べにくい方は交換させていただいたりしている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	×	職員と一緒に食事ができなく(イベント以外)、見守りや介助を行っている。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	今日は献立を報告したりして、食べたいという声掛けしている。	○		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	カロリーまではチェックしていないが、水分摂取量等はチェックし、こまめに水分補給の声掛けと提供している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	お茶寒天を作ったり、果物、ゼリー(フルーツ、コーヒー)、水ようかんなど食べやすい物、飲みやすいのを提供している。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	献立表を利用して、偏りがないようにしている。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食中毒予防として、まな板等は、ハイター消毒し、食洗器にて乾燥し、テーブル等はアルコール消毒し、こまめに賞味期限チェックし早めに使用している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	口腔ケアの必要性は理解し、声かけ等しながら行っている。	/	/	/	訪問歯科医から指示やアドバイスをもらうなど、職員は口腔ケアの重要性を理解している。利用者の状態に応じて、1日1～3回歯磨きなどの口腔ケアを実施する際に、職員は口腔内の様子を確認している。また、異常や問題が生じた場合には、早期の訪問歯科診療に繋げている。さらに、一人ひとりの口腔内の状態や治療状況などが記録に残され、職員間で共有している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	常に声かけし、確認しながら対応し、痛みや不具合がある場合、協力医歯科医院に連絡し対応を行っている。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	利用者の状況に応じて対応している。拒否有無にて	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	声かけし対応しているが、拒否される場合もあり努力している。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	歯磨きが出来る方はご自分で、声かけしながら対応し、介助が必要な方は、出来る所までお願いし、仕上げは職員が行っている。痛み、不具合があったら協力医に相談、受診や往診にて対応している。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	理解しながら、状況にて対応を行っている。	/	/	/	事業所では、基本的に利用者がトイレで排泄できることよう支援している。利用者一人ひとりの排泄状況は記録に残され、職員は排泄パターンを把握し、状態に合わせて声かけやトイレ誘導などの支援に努めている。また、紙パンツやパッドなどの排泄用品の使用時には、カンファレンスの際に職員間で適切な用品の使用などを検討するとともに、家族に相談の上で使用をしている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	職員は、情報を共有しているので理解している。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	職員は状況、情報を共有しているので把握している。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	毎月カンファレンスにて情報、状況の共有し、検討会を行っている。	◎	/	◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	毎月カンファレンスにて状況、情報を共有し検討、見直しを行っている。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	排泄表等を確認しながら対応、声かけを行っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	毎月カンファレンスにて、状況や見直しをし、家族にも状況を報告し了承をいただいている。変更する時に、利用者に試していただき、モニタリングを行っている。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	一人ひとりの体調や状況に合わせて対応を行っている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	毎日体操(運動)の時間を作っているが、利用者の気分に参加する、しないなどがある。職員は声かけしたり対応を行っている。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	週2回の入浴を行っているが、体調の状況にて、利用者の希望や習慣には対応が出来ていない。	◎	/	○	週2回を基本として、利用者は入浴することができる。事業所には機械浴槽が設置され、利用者の状態に合わせて個別浴槽との使用を使い分け、安心安全に湯船に浸かれるように支援をしている。また、利用者の希望に応じて、湯の温度や入浴順、湯船に浸かる長さなど、柔軟に対応をしている。中には、入浴を拒む利用者もいるが、無理強いすることなく、誘導する職員が上手に声かけをしたり、日にちや時間帯を変えたりするなど、利用者にとっても気持ち良く入浴してもらえるような工夫も行われている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	○	見守りながら対応を行っている。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	安全を確認し、声かけしたり対応を行っている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	声かけしながら、廊下などを散歩しながら、気分転換を図り誘導したり対応を行っている。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	職員は、バイタル測定を行って、体調を確認し、状況を共有しながら行っている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	毎日申し送りにて、状況を報告し把握している。	/	/	/	眠剤を服用している利用者もいるが、できる限り日中のレクリエーションの活動量を増やすなど、利用者が夜間に良眠できるよう支援している。現在は、ほとんどの利用者が安眠することができている。また、眠れないことが続く利用者には、健康面を考慮して医師に相談し、指示を仰いで眠剤などを処方してもらうこともある。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	毎日の申し送り時やカンファレンスにて検討し、対応を行っている。(心理状態、生活リズムの確認)	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	医師、訪問看護と医療連携を取りながら、対応している。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	全て個室にて対応しているので、ゆっくり休んでいただける。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	以前は、手紙を書くことが出来る方もいらしたが、レベル低下により難しい。携帯電話を持っている方は居室でお話をされている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	葉書等準備しお渡しするも、書けん、書いてなど言われ、職員が口頭で言われ内容を代筆し、名前のみ本人が書かれる。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	携帯電話を持っている方は自由に電話をされている。要望があれば連絡している(時間帯を考慮しながら)	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	△	携帯電話を持っている方は、ご自分でその都度連絡されている。家族に連絡するも、会話が難しく通訳する形となる。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	家族には了承頂いている。協力である	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	△	本人が所持されている方、所持が難しい方もいらっしゃるため、理解されていても使うことが難しい。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	買い物先への協力、理解の働きかけは行っていないが、職員と一緒に出かけられる事はある。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	△	所持している方もいらっしゃる。ただ家族の要望により所持させたくない、ディサービス、家族間でも、もの取られ妄想がありトラブル回避したい。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	所持している方は、病院受診、買い物等に使用されており、定期的に家族が確認されている。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	購入したい物、必要な物は、職員が買ってきて、施設にて立替を行い、後日請求させて頂く(レシート、領収書送付)	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	△	本人や家族のニーズに柔軟に対応しているが、なかなか難しい。	◎	/	○	コロナ禍以前には、利用者や家族の要望に応じて、外出や外泊などの支援をすることができていたが、コロナ禍において、外出や面会などの制限が設けられ、感染対策を講じた上で、可能な範囲の対応となっている。今後管理者は、感染状況を見計らいながら、「徐々に、多様なニーズに応えられるような支援を再開していきたい」と考えている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	施設の周りに玄関先に季節の花を育てている。	◎	◎	◎	出入り口が広く開かれた事業所は、駐車場が完備されている。民家をリフォームした建物は、周辺の住宅等に馴染んでおり、来訪しやすい雰囲気を感じられる。また、ガーデニングの得意な職員を中心に、玄関周りには、季節の花やミニトマトなどの野菜が植えられている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	○	共用部分には、季節を感じていただけるように、飾り付けしたり、イベントの写真を掲示したり、楽しい場所の提供している。	○	◎	◎	共有空間の清掃や換気が行き届き、利用者は快適に過ごすことができる。リビングの壁面には、季節を感じられる貼り絵が飾られているほか、地方祭などの行事の思い出の写真が掲示されている。また、利用者の楽しみに繋がるように、さつま芋や人参が育てられ、利用者は成長や収穫を楽しみにしている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	カーテンやフィルムを貼ったり、臭いがないようにこまめに掃除したりしている。	/	/	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節を感じていただけるように、飾り付けしたり、イベントをしたり、写真を掲示したりしている。	/	/	◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	△	居室で過ごされる方や食堂で過ごされる方もおり、時々悪口を言われたり、独り言で暴言を言われたりするのでは難しい。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	本人が使い慣れたものや、こだわりの強いものは入居時に持参していただき、配置している。	○	/	◎	居室には、ベッドやタンスが備え付けられている。利用者の希望に応じて、馴染みの物を持ち込むこともできるが、多くの居室に置かれている物は少なく、すっきりとした空間となっている。中には、家族の写真や自分で作った作品、誕生日の寄せ書きなどを飾っている利用者もいる。また、居室内に仏壇や位牌を置いている利用者もおり、希望に応じて、毎朝職員がご飯とお茶を供え、夕方には下膳するなどの対応をしている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	△	以前は、出来ること、わかること、人のお世話など自立している部分もあったが、レベル低下により難しくなっている。	/	/	○	リビングや廊下には unnecessary な物を置かず、車いすの利用者もゆったりと移動できるような動線が確保されている。また、利用者が迷わないように、居室の入り口には利用者の名前や写真を貼られてあるほか、分かりやすいトイレの表示も行われている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	△	本や折り紙など手の届く場所に置いているが収集癖の方もいるので、見守りが必要。	/	/	/	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態に暮らしていること、異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	△	全盲の方で帰宅願望があり、ウロウロされたり、迷子になる方もいらつたり、玄関付近がバスや車の交通量が多いので、安全面を考慮し施設している。	x	◎	△	職員は内部研修などで学び、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。玄関にはセンサーが取り付けられ、職員に利用者や来訪者の出入りを認識しやすくしているが、帰宅願望が強く、不穏な利用者もおり、安全面を第一に考えて、日中にも玄関の鍵をかけるを得ない状況となっている。また、職員は家族へ説明し、玄関の施設の理解を得ている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施設を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	△	玄関付近は車やバスなどの交通量も多いので、安全面を考慮し施設している。家族には、説明し理解を得ている。	/	/	/	
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	△	一人ひとりの既往歴や留意点(事項)は、フェイスシートやカンファレンスにて情報を共有している	/	/	/	/
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	日頃から様子観察をしっかりとし、気付き等を職員が共有し、早期発見し医療連携を取りながら、対応している、記録に残している	/	/	/	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	毎週月曜日に訪問看護に体調確認に来訪されているので、報告、相談している、また2週間に1回の全体往診時に相談、報告しているため、対応がスムーズになっている	/	/	/	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	○	病院系列の施設なので、相談しやすいし、家族の希望がある場合は希望する病院に受診は可能	◎	/	/	/
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	職員が同行し、状況等を説明し希望している病院に受診出来るように支援している。	/	/	/	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	病院を受診したら、家族に連絡し状況を報告、説明している。疑問点がある場合、主治医に報告し、家族への説明を依頼している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	○	フェイスシートに状況を報告を記載し、細かい点や聞きたい場合、電話もしくはFAXにて情報提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	日頃から、しっかりと医療連携を取りながら、情報の共有に努めている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	毎週月曜日に訪問看護に体調確認に来訪されているので、報告、相談している。主治医にも状況を報告をしている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	夜間や急変したら、訪問看護に連絡し、指示や相談出来る体制になっており、必要に応じて主治医で往診に来訪される。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできる体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	体調の変化があれば、報告しすぐに対応できるように、情報を共有している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	定期薬以外の臨時薬、頓服薬が処方された場合、特に様子観察し、体調の変化がある場合は速やかに主治医や訪問看護に連絡している。記録に残している。家族にも状況を報告している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	服薬管理表を活用し、ダブルチェックし、声掛け確認している。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	服薬後もしっかりと様子観察し、変化があれば報告し指示をおおぐよう対応している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	○	入居時に重度化した場合などの意思確認(現状ではなかなか難しいが)、状態が変化していく度に、その都度家族に連絡、話し合いをし対応している。				事業所として、「重度化対応に関する指針」を整備し、入居時に、家族に対応できることなどの説明をしている。利用者の状態が変化し、医療行為などが必要となり、事業所で生活を送ることが難しくなった場合には、母体の医療機関の医師や看護師のほか、家族、職員等と交えて話し合い、方針を共有している。また、病院等への転院する利用者も多く、状況に応じて、事業所で転院支援などの対応をすることもある。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	○	入居時に重度化した場合などの意思確認(現状ではなかなか難しいが)実際重度化した場合は、改めて家族の意思確認その旨を主治医、訪問看護等に報告し、話し合い対応している。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	終末期(看取り)希望している家族に意思確認し、その旨職員に周知(報告)し、意見交換して、職員のレベル、対応力を判断し支援を見極めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	受け入れ体制や要望にお答えしたいが、出来る事が限られていることを説明し、理解を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	○	主治医、訪問看護等医療連携しながら対応している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	家族に寄り添い、お話し、主治医にも相談しながら不安の減少に努力している。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	内部研修にて勉強会を行い、時には訪問看護師に感染症対策方法の講師を依頼して行っている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	感染予防に対応し、準備物を置いており、万が一感染したら、医療連携を取りながら拡散しないよう対策している。常にアルコール消毒を行っている。利用者が使う手すり、トイレなどは念入りに行っている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	感染症の状況について、インターネットやホームページ(行政)やニュースにて確認し、対応している。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるように支援している。	○	常に手洗い、消毒し、利用者にも声かけしながら、手洗い、口腔ケアを行っている。来訪者にも念のため体温測定を依頼している。(消毒も)				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	毎月さしも便りにて状況等を報告し、必要に応じて、連絡させて頂き話し合う機会を設けている。	/	/	/	コロナ禍以前は、家族に呼びかけて、事業所の行事に参加協力してもらうことができていたが、現在は家族の参加できる行事の開催を自粛している。徐々に制限も緩和され、家族等への検温や体調の聞き取りをするなどの感染対策を講じた上で、15分程度の面会を可能としている。また、毎月の請求書の送付に併せて、事業所便りを送付し、利用者の近況を伝えている。利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた事業所の運営上の事柄や出来事が十分に伝わっていないことが窺えるため、事業所便りを活用して、新人職員や異動を紹介したり、手紙などを活用して、家族に担当職員等の退職を報告したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	△	以前は、イベントの参加依頼をし、交流等を図っていたが、コロナ禍では、参加出来る機会がなかった。	○	/	△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たよりの発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等」)	○	毎月のさしも便りやブロックにて日々の生活状況載せている。施設内に写真を掲示し、来訪時写真等を見ながら報告をさせていただいている。	◎	/	○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	さしも便りにて状況を報告を行い、来訪時に確認して頂き、対応方法について、お話し理解を得ている。必要な物などの協力していただいている。	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	△	さしも便りやイベントの参加依頼や法改正にて変更部分のお知らせ等は報告しているが、職員の移動、退職については報告していない。	×	/	△	
		f	利用者一人ひとり起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	リスクについては、常に報告し、維持出来るように努力しますが、今後は、維持出来ない場合もあります。いろいろ検討している旨を伝えさせていただいる。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	情報の共有しているので家族共に良い関係を築いて、来訪時には気さくに声をかけて頂き、心配事の相談して頂いている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	○	法改正等で変更した場合は、書面等利用し説明し理解を得て、署名押印をいいる。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	主治医が施設での生活や支援が難しいと判断した場合、主治医の説明以外にも施設も説明を行っている。	/	/	/	
III. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	△	以前は、イベント情報を報告したり、交流を図って理解をしていたが、コロナ禍では難しかった。	/	◎	/	コロナ禍以前は、地域住民と一緒に餅つきをしたり、地方祭などの行事に参加したり、運営推進会議に参加してもらうなど、利用者と交流を図ることができていた。コロナ禍において、事業所周辺の散歩時に、近隣住民へ挨拶や会話を交わす程度に留まっている。また、事業所は町内会に加入し、地域の回覧板などが回ってきている。今年の夏には、事業所の夏祭りを開催することができ、利用者と一緒に楽しむことができた。今後管理者は、感染状況等を見計らって、「徐々に地域との交流を再開していきたい」と考えている。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	施設の周りの散歩や外出には、あいさつ等を心掛けていたが、コロナ禍で地域行事への参加は出来ていない。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	コロナ禍では、難しかった。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	コロナ禍では交流が難しかった。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	施設の周りの散歩や外出には、あいさつ等を心掛け、以前のようにお越しくさいと誘っている。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	×	コロナ禍では、イベントの参加やボランティアの依頼が出来ず、交流等が難しかった。	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	△	以前は利用者と散歩しながら買い物に出かけたり、消防署にて消防訓練したり、外部より講師を呼び研修資を行っていたが、コロナ禍では、難しかった。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	以前は、参加して頂いていたが、コロナ禍では、書面にての報告になっている。	×	/	△	コロナ禍が続いているため、運営推進会議の開催は、現在も書面開催となっている。コロナ禍以前は会議案内を家族へ送付し、参加協力してもらったこともあったが、現在は案内を送付していない。コロナ禍が落ち着き、集合形式の会議開催が可能となった場合には、全ての家族に会議の参加案内を送付したり、会議の終了後に参加できなかった家族等に議事録を送付したりするなど、より多くの参画を得ながら、有意義な会議開催となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	書面の中での報告になっている。	/	◎	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	以前は、参加しやすいように努力していたが、コロナ禍では、難しかった。	/	/	○	
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	理念を理解して業務に活かしている。	/	/	/	/
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	以前は、面談等に来訪された時にお話しさせて頂く機会があったが、コロナ禍では、伝える機会が減った。	×	×	/	
42	職員を育てる取り組み ※文書の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	毎月、内部研修を行ったり、必要と考えたら、積極的に外部研修に参加出来る取り組んでいる。	/	/	/	医師である代表者は週2回程度事業所を訪れ、釣れた魚を持ってきてくれたり、利用者と一緒に歌を歌って和やかな時間を過ごしたり、職員に気軽に「困りごとはないか」などの声をかけて、コミュニケーションを図るなど、積極的に利用者や職員と関わりを持つ時間を大切にしている。職員は、代表者の利用者への思いや気配りが伝わってくるほか、代表者に直接意見を聞いてもらえることが、モチベーションにも繋がっている。また、様々なテーマを取り上げて、毎月内部研修を実施するほか、必要に応じて外部研修の受講する機会を設けたりするなど、職員の働きがいやスキルの上に向けて取り組んでいる。さらに、職員同士の良好な関係も築かれ、事業所の人員配置に余裕まではないが、希望休や有給休暇を取得できるなど、働きやすい職場環境づくりをしている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	毎月、内部研修を行ったり、必要と考えたら、積極的に外部研修に参加依頼している。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	資格を希望している職員には取得出来るようにシフト配慮したり、資格手当など充実させたり、働きやすい環境や能力評価し賞与等に反映している。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	△	内部研修にて勉強会を行っているが、コロナ禍では、多施設との交流等は難しかった。研修内容でリモートでの参加者はいた。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	自己評価表を参考にして、個別面談等を行い、ストレスの軽減に取り組んでいる。	○	○	◎	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	○	年2回内部研修にて研修し発見した場合の対応方法や手順について理解し業務を行っている。	/	/	○	年2回、内部研修の中で、虐待防止などを学ぶ機会を設けられ、職員は虐待や不適切ケアにあたる言動などを理解している。また、言い方がきつく、大きな声を出すなどの不適切な言動が見られた場合には、職員間で注意し合うとともに、管理者に報告して、該当職員に指導や注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	毎月の内部研修時にケアの確認されたり、状況に応じてアドバイスしたり対応を行っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	日常会話を通して思いや、意向を聞き取りながら取り組んでいる。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	年2回の内部研修にて勉強会を行い、正しく理解して業務を行っている。	/	/	/	/
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	年2回の内部研修にて勉強会を行い、日々の業務の中での、気づき・考察している。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を促している。	○	緊急時、やむを得ない状況で、安全を確保するため行う場合がある。その都度説明し承諾をいただいていること、身体拘束を行う場合は、期間や時間、場所、モニタリング等行っていると説明している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解し、利用者が家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	×	入居時にされている方や家族が相続等が発生した場合は個人的にさせたりしているため、相談や勉強会をする機会がなかった				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	△	以前は、運営推進会議等に参加していたが、コロナ禍では、なかなか難しかった。施設の状態、問い合わせ等で連携している				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	内部研修にて勉強会をし、周知マニュアルを作成している				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	内部研修にて勉強会を行い、確認している				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故発生後に緊急カンファレンスにて、検討して対策、防止を行い、毎日の気づきから考察し再発防止に努めている				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	一人ひとりの状況、状態の変化等、申し送りノート、気づき、カンファレンスにて、検討し事故防止に取り組んでいる				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情対応マニュアルを作成し、苦情窓口も設置している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情が発生した場合は、職員で検討会をし改善し、必要な場合は、介護課に報告、相談し改善を行う				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	苦情に対しての対策を検討し、改善点、状況を報告し、了承を得ている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	家族が話しやすい環境に努めており、苦情相談窓口や担当者を配置していること、行政の苦情相談窓口も周知している	○		○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞き、可能な範囲で対応をしている。家族には、来訪時や電話連絡時を活用して、職員から利用者の様子を伝えるほか、意見や要望を聞くように努めている。また、入居時に、管理者等は利用者や家族に対して、苦情相談の窓口や受付手順などを丁寧に説明している。さらに、日頃から管理者は、職員とのコミュニケーションを大切にしながら意見を聞くよう努めるとともに、カンファレンスの際に、職員から必ず1回以上の発言をもらうなど、職員から出された意見を収集し、利用者本位の支援へ繋げられるように取り組んでいる。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	契約書に記載していること、キーパーソン以外の家族にも来訪時苦情相談窓口の担当者や行政の苦情相談窓口があり、相談出来る事を伝えている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	△	以前は、ほぼ毎日来られていたが、自身もコロナ感染されたり、施設内でもコロナ感染したりで、日数が減った。現在は週2回で来られ、利用者や職員に声をかけられている。管理者に確認等、されている				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	内部研修時に、利用者介護支援についてや運営について周知、意見交換したり、個別に話し合いを設けている			○	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	年2回自己評価シートを使って評価している。				外部評価の自己評価は、職員に意見を聞きながら、管理者を中心に作成している。サービスの評価結果は、運営推進会議を活用して、参加メンバーに報告をしている。コロナ禍が落ち着いた際には、家族や会議の参加メンバーに呼びかけて、目標達成の取り組み状況などのモニターに協力してもらったり、状況を伝えて意見をもらったりするなど、サービス評価の取り組みに理解が得られるような周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	内部研修時に職員に周知、理解し取り組んでいる。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	コロナ禍で書面にての報告になっており、モニターまでの交流が出来なかった。	△	△	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	△	2ヶ月に1回、施設の活動状況を書面にて報告(コロナ禍で)				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	内部研修時に職員でマニュアル点検、確認し、周知している。	/	/	/	コロナ禍以前には、消防署や地域住民に参加協力してもらい、合同の避難訓練を実施することができていたが、コロナ禍が続いていることもあり、職員のための訓練実施となっている。法人・事業所として、様々な災害などのマニュアルを作成し、研修の中で災害発生時の対応などを学ぶこともある。利用者家族等、地域アンケート結果から、災害への備えに対して十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には訓練の様子の写真を事業所内に掲示したり、家族や運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、周知や理解を得る方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	担当者が訓練けいかくをあげ、消防立会いのもと訓練を行っていたが、コロナ過になり施設のための訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	定期的に確認(賞味期限等)補充している。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	コロナ以前は、外部からの研修、訓練指導や連携もあったが、コロナ禍では、難しかった。	×	×	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	コロナ禍では、参加出来なかった。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	コロナ禍で接触(交流)を控えており、地域に向けて発信が出来なかった。	/	/	/	地域住民から入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしているが、コロナ禍が続いていることもあり、地域住民の事業所への来訪自体が少なくなっている。また、事業所では、高校生の実習の受け入れに協力をしている。さらに、市行政や地域包括支援センターなどの会議や研修に参加する機会は少なくなっているものの、法人内の他の事業所等と協力しながら、連携を図ることができている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	×	コロナ禍では地域の方も遠慮されているので、難しかった。	/	×	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	コロナ禍では地域の方々交流が出来なかった。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	コロナ禍では地域の方々交流が難しかった。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	△	2ヶ月に1回、施設の活動状況を書面にて報告している。	/	/	○	